

関係各位

2014 年 6 月 29 日

国際審判員 中島大祐

(国際委員 兼 審判スタッフ)

【大会参加報告】2014/5/16～5/18 アジアカップ I (埼玉県戸田市)

2014 年 5 月 16 日 (金)～18 日 (日) に埼玉県戸田ボートコースで開催されたアジアボート連盟 (ARF) 主催のアジアカップ I (Asian Rowing Cup I、以下「AC」) に参加しましたので以下の通り報告します。派遣して頂いた日本ボート協会の関係各位にこの場を借りて御礼申し上げます。

1. はじめに

- (1) 私は、2011/8 に大阪で実施された FISA 審判員試験で資格を取得し、今回が国際審判員デビューとなった。(2013/11 にアジアカップ II (Hong Kong) でデビューの予定であったが、ITO 人数削減により実現していなかった。) 資格取得も審判業務デビューも日本で迎えることになった訳だが、諸先輩方が海外のアウェーの地で資格を取得し、審判デビューを果たしてきたことを考えると、幸せに感じると共に、申し訳ない気持ちもある。
- (2) 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック招致を受けて、日ボは数々の国際大会を日本に招致する計画であるが、今大会は、その皮切りというべきもの。戸田ボートコースで開催される国際大会としては、1991 年開催の第 4 回アジア漕艇選手権以来、23 年ぶり。
- (3) 戸田ボートコースを通常の日ボ大会と同じく 0m から 2000m、1 レーンから 6 レーンを使用して大会を実施。(日ボ主催の全日本軽量級選手権 (Japan Cup、以下「JC」) との併催。) 従来の戸田における日ボ大会の運営と異なる点としては、Control Commission を確実に行う為に Out Pontoon (出艇栈橋) と In Pontoon (帰艇栈橋) を国立艇庫前に指定したこと、光発艇装置を使用したこと、着順判定を写真判定装置により行ったこと、等が挙げられる。ダブルエントリーの関係で、毎日、1X と 2X を早めの時間帯、4X を遅めの時間帯に行った。レース間隔は 10 分間 (最終日は一部 15 分間)。

2. 大会概要

(1) 大会日程

2014 年 5 月 16 日 (金) 予選 14 レース

5 月 17 日 (土) 敗者復活 8 レース・準決勝 4 レース

5 月 18 日 (日) 順位決定 7 レース・決勝 6 レース

(2) 実施コース

埼玉県戸田ボートコース

(3) 参加国・参加人数・種目

参加国： 11 ヶ国 (TPE、HKG、INA、IRI、JPN、KAZ、KOR、PHI、SIN、THA、VIE)

参加人数： 185 名 (選手・役員合計)

種目： 6 種目 (LM1X、LM2X、LW1X、LW2X、M4X、W4X)

3. 審判員・審判用具

(1) 審判員 (ITO)

日本から2名、海外から6名の総勢8名で審判団を構成した。ベテラン2名（千田 PJ と Kutty）以外の6名は、国際大会参加1～3回目のフレッシュなメンバーであった。

	氏名	愛称	ライセンス No.	国名
①	Takao SENDA (PJ)	Takao	1230	JPN
②	Krishnanand HEBLEKAR	Kutty	1390	IND
③	Kowk Keung CHEUNG	John	1626	HKG
④	Daisuke NAKAJIMA	Daisuke	1627	JPN
⑤	Dong Hoon KAY	DH	1635	KOR
⑥	Pornthep RACHNAVY	Joe	1660	THA
⑦	Sun Ho MUN	Mun	1682	KOR
⑧	Aung Than Toe	Aung	1709	MYA

(2) 部署別人数及び NTO 業務

ITO 8 名体制の為、CC は 1 名、主審は 3 名とし、以下部署割り及び NTO との業務分担とした。

部署	ITO 人数	NTO の業務	NTO 人数(注)
PJ(審判長)	1 名	—	—
発艇	1 名	呼び込み補助	1 名
線審	1 名	艇揃え	2 名
判定	1 名	PC 操作、バックアップ(視認)	3 名
主審(3 艇)	3 名	操縦者	3 名
CC(監視+艇計量)	1 名	出艇帰艇監視+艇計量	5 名+3 名
CC(選手計量)	0 名	選手計量(PJ が時々確認)	4 名
合計	8 名		

(注) NTO 人数は、報告者の認識による最低必要人数。実際には、各部署に最低 5 名ずつの NTO がいた。又、原則各部署には国際審判員資格保有者が配置され、ITO とのコミュニケーションを図って頂いた。

(3) 審判用具

各部署で使用した主な用具の概要は以下の通り。☆印は従来の日ボ大会で使用していない用具。（詳細は 6. を参照。）

- ① 発艇： ☆光発艇装置、赤旗・鐘（不正スタート用及びバックアップ用）
- ② 線審： ☆階段式座席、☆白ランプ、☆赤ランプ
- ③ 判定： ☆写真判定装置（メイン）、☆階段式座席、☆白ランプ
- ④ 監視： ☆i-Pad 型フォトブック、艇計量機、選手計量機
- ⑤ 主審： カタマラン、旗・鐘

4. 日程及び行動

(1) 5/14 (大会前々日)

- ・ 宿舎到着 (浦和ロイヤルパインズホテル)

ITO 8 人中 6 人が宿舎にチェックイン。(John と中島は大会前日に戸田入り。)

(2) 5/15 (大会前日)

- ・ 15:00~16:00 Team Managers Meeting and Draw

戸田公園事務所 2 階の Team Managers Meeting Room でコーチ、選手、通訳 (ボランティア)、大会役員 (含む ITO) 等が参加し実施。HKG のコーチ等が納得するまで質問を続ける姿が日ボ大会と異なる点だと感じた。

- ・ 16:00~17:00 Jury Meeting and Inspection

ITO Room で Jury Meeting を実施後、陸上・水上から Inspection を行った。(水上は埼玉県和田理事長のご協力を得た。) Inspection の最後に交替で発艇塔に上り、光発艇装置の操作を練習した。(愛知県ボート協会の徳光氏に指導を受けた。)

- ・ 17:00~17:30 Practical Start

Inspection に続き Practical Start を 10 回ほど行った。偶々その時間帯に練習をしていたクルーに「Practical Start !」と声をかけた後、光発艇装置で発艇号令をかけた。ボートホルダー (ウォーターマン) は配置しなかったが、発艇号令に合わせてスタート練習をするクルーもいた。

(3) 5/16 (大会初日)

- ・ 08:00 宿舎出発

大会期間中、千田 PJ・中島自家用車 (2 台) に分乗し宿舎と戸田コースを往復した。

- ・ 08:30 ITO Meeting

部署割が配布され、PJ が ITO と NTO の業務分担等を説明した。(発艇では NTO が呼び込み補助を行う、線審のアライナーは NTO が行う等。) 私は初日の Board of Jury (BOJ) 3 名の内の 1 名に選ばれた。(BOJ は PJ+他 2 名 (日替り) の計 3 名で構成。)

- ・ 10:00~11:30 予選 10 レース

発艇を担当。当日 07:00 からの JC で発艇を担当していた NTO 数名がそのまま発艇塔に残り、呼び込み補助を行った。担当した 10 レースの内、2 クルーに定刻 2 分前遅刻の警告を与えた。1X の選手の中にはポンツーンの後ろ側に回り込んで自己のレーンに入るクルーがいたが危険を伴う為、昼休みの ITO ミーティングで申し送りをした。

- ・ 不正スタート

レース No.7、LW1X 予選 1 組、4 レーンの KOR がフライングし、スタート 3 本目くらいで線審が赤ランプを点滅させた。NTO (国際審判員の岩尾さん) に「赤ランプ！」と声を掛けられてから気付き、慌てて赤旗を振り鐘を鳴らしてレースを止めた。「KOR、False Start、All the boats come back to start」と呼び込み用マイクで声を掛け、再レースを行った。

- ・ 13:00~13:30 予選 4 レース

主審 (M1) を担当。4X 予選 2 レースを担当したが、レーン侵害、接触・妨害等はなかった。

- ・昼食（戸田競艇場 東ホール）
- ・夕食 ARF & OC Dinner（宿舎内、和食レストラン）

ARF 側は Ken Lee 事務局長、ITO8 名等、OC（Organizing Committee）側は日ボ大久保会長、木村理事長等、合計 20 名での和気藹々としたディナーとなった。

(4) 5/17（大会 2 日目）

- ・ 08:00 宿舎出発
- ・ 08:30 ITO Meeting

部署割配布の後、PJ が以下前日の反省点を説明した。

- ① 発艇が呼び込み時に見当たらないクルーの搜索を主審に要請した際、CC から当該クルーの出艇時刻の連絡があった。良い連携だったと思う。
- ② 発艇定刻に遅れそうなクルーが回漕レーンを漕ぎ上っていることを主審が発艇に伝えた。これも良い連携の例。
- ③ CC が艇の広告等を自らガムテープでマスキングしていたが、審判は直接手を出さず、クルーに指示してマスキングさせること。なお艇のメーカー名と国名、艇の名前はマスキングする必要なし。

- ・ 10:50～12:30 敗者復活 5 レース

線審を担当。アライナー（NTO）が「各ウォーターマン、そのまま良し、ありがとう」と言っても、自身が揃っていないと判断した時は白ランプをつけなかった。担当した 5 レースに不正スタートはなかった。

- ・ 昼食（戸田競艇場 東ホール）

- ・ 15:40～17:30 敗者復活 3 レース、準決勝 4 レース

CC を担当。出艇時のクルー確認は NTO が行った。ヒールロープを結んでいないクルー、結んではいるが長過ぎるクルーが多く、自身又は NTO がその場でクルーに指示し約 7cm に調整させた。帰艇時のクルー確認も NTO が行い、自身は艇計量対象クルーに艇計量所に向かうよう指示をした。（出艇と帰艇が重なる時は帰艇栈橋にいるようにした。）艇計量に向かうクルーについて行き、NTO が行う艇計量の結果を確認後、栈橋に戻った。

- ・ 夕食 ITO & NTO Dinner（戸田、三菱養和会食堂）

ITO 8 名と今回戸田に集まった国内審判資格保有者とのパーティーだったが、B 級試験合否発表もあり、たいへん盛り上がった。

(5) 5/18（大会最終日）

- ・ 08:00 宿舎出発
- ・ 08:30 ITO Meeting

部署割配布の後、PJ から表彰式に関する説明があった。決勝レースでは、着順確定後、判定が PJ に無線で「KOR、HKG、JPN1」と着順の速報を行い、これを傍受した主審は当該クルーに対し「KOR、HKG、JPN1、Go to Victory Ceremony」とその場で伝える、というもの。いよいよ最終日まで来たとの思いが強くなる。

- ・ 10:40～12:15 決勝・順位決定 9 レース

主審 (M3) を担当。当初 M1→M2→M3 のローテーションだったが、レース No.31 (この日の 5 レース目) の約 10 分前に M2 が故障により離脱すると無線が入った。M3 が繰り上がり、M2 復旧までの 4 レースを M1 と M3 で交互に追航した。表彰式の関係で 10 分間隔と 15 分間隔が交互にあり、曳波も含め問題は生じなかった。

- ・コースブイの曲がり

レース No.29、LM1X 決勝、4 レーンの JPN1 から、定刻約 15 分前 (当該クルーは 600m で練習中) に 4・5 レーンの境界ブイが曲がっており、4 レーンが他のレーンより狭いとの申告があった。直前のレース No.28 の発艇後、無線で発艇に状況を確認してもらったが発艇部署からは曲がっているように見えないとのこと。自身が 300～400m 周辺で視認すると、クルーの申告通り若干の曲がりがある。ワイヤーの緩みが疑われた為、線審小屋待機の水路役員 (関東学連) に事態の確認と調整を要請し、定刻直前に調整を完了させてもらった。

- ・昼食 (戸田競艇場 東ホール)

- ・17:00～17:35 決勝・順位決定 4 レース

判定を担当。自身は決勝戦延長線上には座らず、PC オペレーター (NTO) の隣に座り、オペレーターの作業を確認した。オペレーターが PC 上で着順確定を行い印刷する 2000m 着順表の内容を確認し、記録係 (関東学連) に手渡した。500～1500m のタイムが入力された Results Sheet が回付され、内容確認後にサインをした。

- ・夕食 Farewell Party (戸田競艇場 イベントホール)

大会が終了し、Farewell Party が開かれた。日ボ大久保会長の英語によるお礼のスピーチや ARF Ken Lee 事務局長のスピーチまでは厳かな雰囲気だったが、その後は機転の利く司会者の進行で、インドネシアチームのダンスやタイチームの歌まで飛び出す、大変楽しいパーティーであった。ITO8 人と話すのはこの席が最後ということで名残惜しさを感じた。

5. おわりに

- (1) 国際審判デビューにあたり、国内大会とのルール及び審判業務の相違を意識して業務を行った。線審はアライナーが揃え終わったと思っても自身が納得するまで白旗を上げないこと、主審はクルーに曳波を被せてでも主審艇を躊躇わずに前へ出すこと、CC はヒールロープ等に問題があれば即座にクルーに指示を出すこと、等、自信をもって業務を行うことができたと思う。
- (2) 今回の ITO は、6 名が国際大会参加 1～3 回とフレッシュなチームであったが、1 日 2 回のミーティングでは、PJ が挙げるテーマをただ聞いているのではなく、積極的に質問をしたり、新たなテーマを提示したりと、全員が向上心旺盛であった。このようなチームの中で審判業務を行うことができ、大変光栄に思う。またその活性化に千田 PJ が腐心していたことも、大変参考になった。
- (3) 3 日間で全ての部署を担当させて頂き、大変良い経験になった。部署割に関し千田 PJ には多大なるご配慮を頂いたと思う。感謝申し上げたい。

- (4) 海外 ITO の 6 名には、5/17 の ITO & NTO ディナーの前に、日本の審判昇格システムと B 級昇格が狭き門であることを説明していた。ディナーでは恒例の合否発表があったが、6 名からは、「大会期間中のイベントの中で、この日のパーティーが一番印象に残った。合否発表の悲喜こもごもが伝わってきた。日本の審判団はスキルが高く、結束力もある、見習いたい。」との感想を聞くことができ、嬉しい思いをした。

以 上

<別紙>

6. 審判各部署の設備・運営

7. 審判用具に関する今後の課題 ～日本における今後の国際大会運営にあたり～

<別紙>

6. 審判各部署の設備・運営

(1) 発艇

- ① 光発艇装置：戸田コースの 2000m レースで初めて光発艇を使用。装置一式（信号機 10 台、操作盤、接続ケーブル等）は愛知県ボート協会からレンタル。
- ② 信号機：8 台を使用。6 台は各レーンのステイクボートのウインチ操作部（水上に固定されている浮棧橋）に、クルーがやや上方を見ると直視できる高さに設置。1 台は発艇モニター用として 6 レーンステイクボートに発艇部署に向けて設置。残る 1 台は線審モニター用に線審対岸の 0m マークの左（マイナス方向）約 5m の陸上に約 50cm の台に乗せて設置。
- ③ 操作盤：発艇部署（発艇檣 2 階）に設置し、8 台の信号機には架空配線により接続。
- ④ 操作方法：メインスイッチをオンにし、音声スイッチをオンにすると準備完了。ロールコール終了後、赤ランプ点灯ボタンを押し、アテンションを発した後、青ランプ点灯ボタンを押すと、「ピッ」という単音が鳴ると同時にランプが赤から青に変わる。約 10 秒で青ランプは自動的に消灯する。
- ⑤ 不正スタート対応：愛知県の装置には赤ランプの点滅と断続音（ピーピーピー）の機能がない。不正スタート時には、リセットボタンを押し、赤ランプ点灯ボタンを押すことで、再度赤ランプを点灯させ、それと共に赤旗を振り、鐘を鳴らすことでクルーに知らせる。
- ⑥ 発艇マイク：戸田公園常設のワイヤレスマイク（通常の国内大会で使用しているもの）を使用、大会会場全体に発艇号令が聞こえる体制であった。（判定部署はこの音声をもとにタイム計測を開始。）
- ⑦ 呼び込み：光発艇装置付属の有線マイク（ボーカルマイク型）を使用。音声は 8 台の信号機に付属しているスピーカーから出るが、200m 程度までは十分音声が届く。（日ボ大会の 15W ハンドマイクより到達距離は長いと思われる。）

(2) 線審

- ① 着席方法：発艇線の延長線上に階段状の台を用意し、(a)床レベル、(b)+30cm、(c)+60cm 夫々に椅子を置いた。(a)に ITO が、(b)、(c)に NTO が着席。（初日午前は、誤って ITO が(c)に着席していた。）
- ② 白旗／赤旗：白ランプ（LED の点滅）と赤ランプ（回転灯）を使用。片手で操作できるスイッチは ITO が両手に持って操作。（初日午前、誤って(a)に座った NTO が操作していた。）
- ③ 艇揃え：ITO は全艇の艇首が発艇線上に揃うと白ランプを点灯する。アライナーである NTO は、艇が揃うと国内大会同様「各ウォーターマン、そのままよし、ありがとう」と言うが、ITO はそれとは関係なく自己の判断で白ランプを点灯する。
- ④ フリーズシステム：海外での主な国際大会では、発艇号令（信号が赤から青に変わりブザーが鳴る瞬間）と同時に、発艇線上に艇首が並んだモニター画面がフリーズし、そのフリーズ画面で艇首が発艇線を越えているクルーを不正スタートと判定す

る「フリーズシステム」を使用することが一般的である。今大会ではこのシステムが用意されておらず、国内大会同様、視認による不正スタートの判定を行った。

- ⑤ 不正スタート判定：ITO は対岸 0m マーク左横に設置されている線審モニター用の信号機が赤から青に変わる瞬間と、艇首の動き出しを比較して、不正スタートを判定する。不正スタートがあれば白ランプを消し、赤ランプを回転させる。（注：対岸の信号機は、初日設置されておらず、ITO は発艇号令（ブザー音）を「聞いて」不正スタートを判定していた。当初、6 レーンの信号機を見れば、青信号に変わる瞬間がわかると思っていたが、発艇線に対し左 60 度くらいの角度がある為、艇首と同時に視野に収めることは困難であることが判明。（NTO が 6 レーンの信号機を見て「肩叩き」を行うという選択肢はあったが採用しなかった。）愛知県・徳光氏の機転で、2 日目午前に対岸に信号機を設置して頂いた。）

(3) 判定

- ① 判定方法：写真判定装置を用いた着順判定と 2000m 計時をメイン、視認による着順判定とストップウォッチを用いた 2000m 計時をサブとした。
- ② 判定室：写真判定を行いながら、視認も同時に行うという条件を満たす為、公園事務所 2 階東端の会議室を判定室として利用。（コース際の判定塔では写真判定装置（PC とプリンター）が雨に晒され不可。一方で公園事務所 1 階では高度不足で視認ができず不可。）
- ③ 審判用具：写真判定装置は日ボ所有のもの（戸田に常備）を使用。今回、プリンターを接続し、着順・2000m 計時結果・写真をレース毎に印刷した。レース成立後の主審白旗に呼応して示す白旗に代えて白ランプ（LED の点滅）を使用。スリット（サブ判定に使用）は窓枠に、ブザーは窓の外（1 階の庇にあたる部分）に設置。
- ④ 着席方法：決勝線の延長線上に階段状の台を用意し、(a)床レベル、(b)+30cm、(c)+60cm 夫々に椅子を置き、サブ判定を行う NTO が着席した。(a)は会議室の窓ぎりぎりまで前方に出て座り、(a)のすぐ右に写真判定装置を設置する机を置き、写真判定装置（PC 画面及びキーボード）の前にオペレーター役の NTO が、その右脇に ITO が着席した。
- ⑤ メイン判定：ITO1 名と写真判定装置のオペレーター役の NTO1 名で実施。国体等のように専属のオペレーターがいない為、NTO が交替でオペレーター業務を担当。適宜、日ボ高橋競技委員にサポートをお願いした。
- ⑥ サブ判定：NTO3～4 名が通常の日ボ大会と同じ方法（ヨーイ、テッを含む）で実施。
- ⑦ 写真判定装置オペレーターの業務：発艇号令（ブザー音）を全国放送で聞き、装置のスタートボタンを押し、装置内の時計をスタートさせる。各競漕艇の艇首が決勝線を通る間（数秒の時間帯）、装置のカメラ撮影ボタンを押し続け、スリット写真の撮影を行う。レース成立後、PC 画面に 1 着の競漕艇が写っている部分を表示し、艇首にカーソル（画面上は赤い縦線）を合わせ、レーン No.を入力し、確定ボタンを押すと、装置内の着順表の 1 着の欄に、レーン No.と 2000m タイムが現れる。2 着以降も同様の処理を繰り返し、着順表を完成させる。印刷ボタンを押し、レース毎に着順・2000m 計時結果・写真を 1 枚に印刷する。

- ⑧ ITO の業務：オペレーター役 NTO の業務及びサブ判定の NTO の業務を確認する。
オペレーター業務の確認の中で以下は特に重要である。(a)装置のスタートボタンが発艇号令と同時に押されたか、(b)各競漕艇が決勝線を通過する間、カメラ撮影ボタンが押され、全ての競漕艇のスリット写真が撮影されたか、(c)着順確定を行う際、艇首にカーソルが合っているか、正しいレーン No.が入力されているか（これが適切でないと着順と 2000m タイムが正しく記録されない）。
- ⑨ <参考>記録係：サブ判定の計時を行う 2000m 記録係（関東学連数名）は ITO、NTO と一緒に判定室で執務。記録係はインターホン（公園事務所所有の有線電話）を用いて 500m、1000m、1500m のタイムを聴取し、着順表に記入。レース成立後、判定部署の審判から聴取した着順を記入した上で、着順に応じた 2000m タイムを記入するという手順。本大会では写真判定装置から印刷された着順・2000m 計時結果を ITO から受け取り、着順・2000m タイムを転記する方式を採った。なおインターホンは判定室に配線を延長して利用できるようにした。

(4) CC（監視）

- ① フォトブック：iPad に日ボが製作したソフトを搭載し、フォトブックとして使用した。種目・国名等で検索をするとクルーが表示され、更に選手個人を特定すると氏名・写真等が表示される仕組み。最終日にオーバーヒートを起こして不具合が発生、改良の余地がある模様。
- ② 出艇監視：国立艇庫前の栈橋 3 本の内、一番左（南端）を出艇栈橋として使用。クルー出艇時に、(a)フォトブック（＝監視カード、今大会では iPad）、(b)選手が首から下げている ID カード、(c)選手の顔、の 3 点を照合し、iPad に出艇確認済のチェックを付ける。ユニフォーム統一、ブレード統一、バウナンバー（レーンプレート）有無、バウボール（白球）有無、ヒールロープの長さ、艇のステッカー・広告等を確認し、出艇時刻を記録する。実際の確認作業は NTO が行い、ITO は全体を統括する。ヒールロープが長過ぎるクルーが多く、ITO（又は NTO）からクルーに伝え、調整後に出艇させる場面が多く見られた。
- ③ 帰艇監視：栈橋 3 本の内、中央（出艇栈橋の北隣）を帰艇栈橋として使用。クルー帰艇を確認したら iPad に帰艇確認済のチェックを付け、帰艇時刻を記録する。実際の確認作業は NTO が行い、ITO は全体を統括する。艇計量対象クルーには、その場で艇計量に向かうよう ITO（又は NTO）から指示をする。
- ④ <参考>レーンプレート配布・回収係（Bow Number Distributer & Collector）は、配艇係が担当。配艇所近くのテントで配布し、帰艇栈橋でクルーが外したものを何枚か纏めて回収していた。
- ⑤ 艇計量：国立艇庫 2 番艇庫で日ボ所有の艇計量器を用いて NTO が実施。日ボ大会での実施要領は既に FISA 方式に統一されている為、NTO は通常通りの実務を行う。
（従来の日ボ大会で艇計量に使用している「NTC 右」艇庫は、今大会に出場する日本代表が艇の出し入れに使用する為、2 番艇庫を使用した。）
- ⑥ 選手計量：大会本部 1 階西側大会議室（NTO 控室）で実施。NTO4～5 名が実施し、適宜 PJ が巡回して確認を行った。

(5) 主審

- ① 主審艇：M1 から M3 までの 3 艇で実施。操縦は NTO が行い、各艇 2 名乗艇で行った。各艇が発艇からゴールまでを追航し、発艇直前の待機地点は 0m、100m、500m を基本とした。レース間隔は最短 10 分であり、実務上は 3 艇目が 1000～1500m まで戻った時点で発艇を迎えることが多かった。日ボ大会では余程のことがない限り、競漕艇に波を被せて前に出ることはないが、国際大会では上がり数を含むその場の状況に応じて、迷わず主審艇を前に出すよう PJ から指示があった。
- ② 用具：日ボ大会同様、ハンドマイク、赤旗、白旗を用いた。
- ③ レース成立：白旗を掲げる位置は、日ボ大会では主審艇が決勝線を越えてからだが、国際大会ではその点にこだわらない。
- ④ ビクトリーセレモニー：最終日の決勝では 1～3 位のクルーにビクトリーセレモニーに向かうよう、主審からクルーに伝えた。
- ⑤ その他：ITO の内、数名が座ったまま主審業務を行ったが、これは誤りで、後刻 PJ から注意を受けた。

7. 審判用具に関する今後の課題 ～日本における今後の国際大会運営にあたり～

- (1) 発艇/光発艇装置：信号機 6 台を備えた光発艇装置は、日本では愛知池（愛知県）、長沼（宮城県）等、限られた場所にしかない。東京都保有の光発艇装置も信号機を 6 台まで接続することが可能だが、2013 年の東京国体では信号機を 1 台だけ接続して使用した。2020 年に向けてオリンピックコースで専用に使Ⓐ用できる装置が必要となるが、海外で使Ⓐ用されているものを新規に購入するか、愛知・宮城等のものをレンタルするか、東京のものに信号機を増設して使Ⓐ用するか、等の選択肢の中から何れが良Ⓐいかを検討する必要があると考える。
- (2) 線審/フリーズシステム：日本には未だフリーズシステムが導入されていない。（今大会でも使Ⓐ用していない。）日ボ大会でもその使Ⓐ用に慣れ、その後、オリンピックコースで使Ⓐ用するようにしてはどうかと考える。
- (3) 線審/線審旗代替システム：海外での主な国際大会では、艇首が揃った際の白旗掲示の代わりに、発艇部署の手元（光発艇装置の操作盤等）の白ランプを点灯させるシステムが一般的である。また不正スタート時に、線審が手元のボタンを押すと、(a)発艇部署の手元の赤ランプが点滅し断続ブザー音が鳴る、(b)クルーに対して赤ランプが点滅し断続ブザー音が鳴る、の何れかのシステムが導入されている。（(b)は線審がレースを直接止める為、現在の日ボ競漕規則とは異なる。）今大会では何れも使Ⓐ用されていない。(1)光発艇装置、(2)フリーズシステム、(3)線審旗代替システム、の 3 点は一体化した導入が効果的であると考えⒶる。
- (4) 判定/計時システム：中間計時結果（500m、1000m、1500m）と写真判定装置の 2000m 計時結果を一つのシステムに集約する必要がある。具体的には、(a)写真判定装置に計時機能を付加する、(b)別途購入（又は開発）する計時システムに写真判定装置の 2000m 計時結果を取り込む、の何れかが必要となる。(b)の場合、海外で使Ⓐ用されているシステムを導入（購入）する他に、東京都が 2013 東京国体時に開発・使Ⓐ用した記録システム（1000m

レースに対応)を改良・発展させることも選択肢に入れてはどうかと考える。また何れのケースでも、光発艇装置の発艇信号を計時システムに取り込む必要がある。

- (5) 主審/カタマラン：現在、日ボが戸田に常備しているカタマラン 4 艇は、2 艇 (JARA-1、JARA-2) は老朽化が進み、残る 2 艇 (JARA-3、KOKUTEI) は旋回能力に問題がある (小回りが利かない)。新艇の導入を含め対策を講じる必要があると考える。
- (6) 監視/フォトブック：今大会で初めて i-Pad を使用したが、オーバーヒートの問題があったとのことであり、改善が必要と考える。またフォトブックは大会への選手登録 (エントリー) システムとの連動が必須であるが、日ボの選手登録システムとの互換性を実現させれば、国際大会だけでなく、国内の国体やインターハイでも同じシステムが使えるようになると思う。
- (7) 艇計量/艇計量機：現在の計量機にはプリンターが接続してあるが、実際に印刷ができない状態である。印刷ができるよう調整が必要と考える。

<写真>

① 信号機：

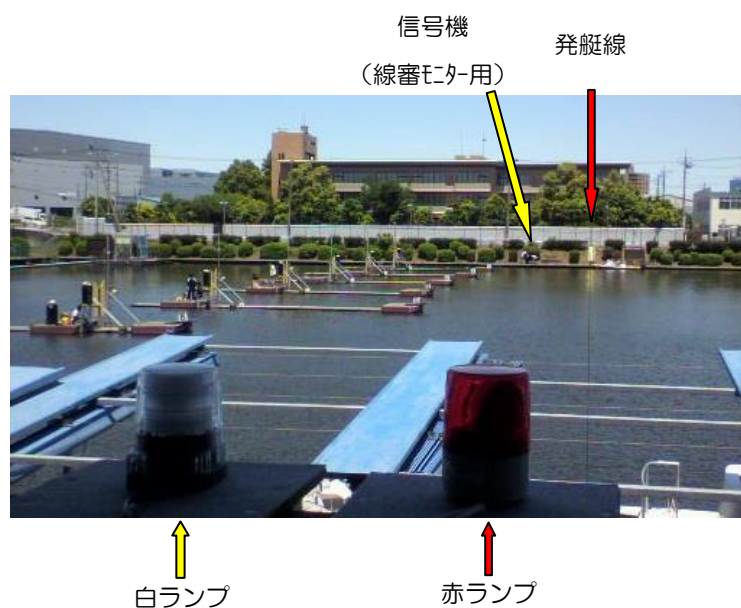
クルー用信号機は各レーンに設置されている。発艇モニター用信号機は 6 レーンに発艇部署から見える角度で設置されている。（写真には背面が写っている。）



② 線審からの眺め：

線審モニター用の信号機は対岸 0m の向かって左 5m 付近に設置されている。

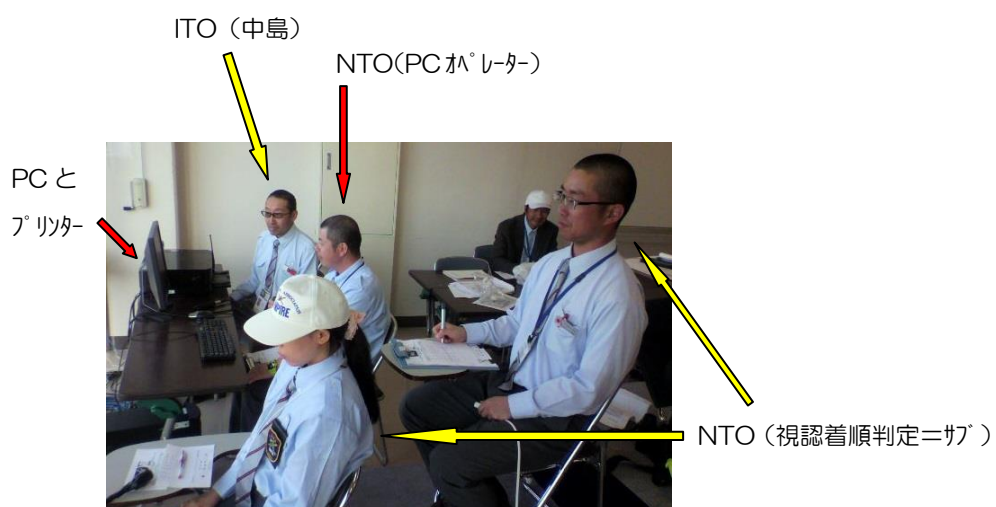
白旗代わりの白ランプ、赤旗代わりの赤ランプは線審小屋の窓枠に設置されている。



③ 線審の着席の様子



④ 判定の着席の様子



⑤ ITO 集合写真



写真左から Mun、Daisuke、DH、Aung、Takao、木村稚夫氏、Kutty、John、Joe

以 上